

第2次大戦期のドイツのサッカー

明石 真和

序

1990年、ドイツ連邦共和国（BRD）とドイツ民主共和国（DDR）は、ひとつの国として再出発した。第2次大戦が終わった1945年に、戦勝国であった連合国の4カ国（アメリカ、英国、フランス、ソビエト）に分割統治され、1949年には2つのドイツが誕生した。その後41年の時を経て、再び統一を果たしたことになる。

再統一をきっかけとして、戦争当時の新たな情報が開示され、さまざまな分野での研究が進んでいる。従来、スポーツを学術研究の対象とする風潮に乏しかったドイツでも、少しずつではあるがその方面に関する学術的な論文が現れている。「大衆のスポーツ（Volkssport）」と呼ばれるサッカーについても、その歴史をテーマにした研究成果が発表されている。

本論文は、それらの研究をふまえ、第2次大戦期のドイツのサッカーについて概略的な記述を試みたものである。以下では、先ずI章でサッカーというスポーツがドイツに伝わった当時の事情と、その後の発展について触れる。さらに、II章では、第2次大戦という激動の時代のドイツにおけるサッカーをめぐる事情について、その全般にわたって記すこととする。なお、本稿でいう「第2次大戦期」とは、ヒトラーが政権の座についた1933年1月から、ドイツでの戦争が終わった1945年5月までの時期とする。

本論

I. 第2次大戦前のサッカー事情

1. サッカー誕生

足で球形のものを扱う遊びは、古くから世界各地に存在した¹⁾。その中で、現在サッカーという名称で知られるスポーツは、1863年にロンドンで規則が制定されたフットボール（Association Football）のことである。この年、世界で初めてのサッカー協会（The Football Association, The FA）が設立された。その時点で世界に

ひとつしかない協会のため、国（地域）の名は冠されていない。今もThe FAといえはイングランドのサッカー協会を指す。その後、1873年にスコットランド、1876年にウェールズ、1880年にアイルランドと、英国内の諸地域に次々とサッカー協会が創設されていった²⁾。

こうして誕生した新しいスポーツ「サッカー」は、19世紀後半から20世紀前半にかけて世界中に伝播していった。当初は、海外のそれぞれの地で活動していた英国の商人や学生や船員によって各地に伝えられた。ドイツでは、港町や商業都市、それに大学町を中心に広まっていった³⁾。

2. ドイツ国内でのサッカー受容

1800年代後半のドイツは、国と社会の変革期でもあった。英国に始まった産業革命がドイツに伝わり、工業都市が生まれた。産業の主体が、それまでの農業から重工業へと変わり、労働者とブルジョアといった階級の区別が明確になっていった。1871年には、プロイセンの宰相オットー・フォン・ビスマルクによってドイツ帝国が誕生した。サッカーは、そのような時代を背景に移入されたのであった。

それまでのドイツの身体運動といえば体操（Turnen）が中心だった。1800年代の初期、フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン（Friedrich Ludwig Jahn）によって提唱されたこの身体運動は、当時のフランスの支配に対抗して、来るべき解放の時をめぐりて身体を鍛えるというように、もともと国粋主義的な傾向をもっていた。以降、ドイツ体操家連盟（Deutsche Turnerschaft, DT）が指導的な役割を担い、ドイツで身体運動といえば「体操」という風潮が定着していった。欧州のどの国も、大かれ少なかれ国粋主義的な時代であり、ましてや英国はドイツの一番のライバルとみられていた。そのような時代に英国のスポーツであるサッカーが、英語の規則や用語も含めそのまま入ってきたことになる。時代の気風に明らかに反していたため、ドイツ国内では大きな反発が見られた。サッカー（をするもの）は、「祖国への裏切り（者）」というレッテルがはられた。ことに体操の関係者には、「ほかの身体運動は認めない」という意見が強かった。ドイツ式体操と英国式スポーツをめぐる議論は、その後も長くつづいた⁴⁾。

ドイツにおけるサッカー受容には、2つのルートがある。ひとつはドイツ人教師が輸入して学校を中心に広まったケースと、もう一方では英国人の学生や商人により紹介されたケースである。前節で触れたとおり、サッカーが移入される条件としては、大学（あるいは高等教育の学校のある）町や商業の盛んな都市が優位にあっ

たといえる。現在の有名クラブの所在地は、このいずれかの町であることが多い。

サッカーを伝える中心となったのは、ブルジョアのインテリである教養市民層であった。高等教育を受け、複数の言語に精通し、なかにはイングランドで教鞭をとっていた者もいる。具体的な名前を挙げると次のような人々が、ドイツにサッカーを伝えたパイオニアといえる。

コンラート・コッホ (Dr. Konrad Koch, 1846-1911)：ブラウンシュヴァイクのギムナジウム教師であり、「ドイツサッカーの父」と呼ばれている。

フェルディナンド・ヒュッペ (Prof. Dr. Ferdinand Hueppe, 1853-1938)：ドイツ・サッカー連盟 (Deutscher Fußball-Bund, 以下DFB) 初代会長。プラハ大学教授。

ヴァルター・ベンゼマン (Walther Bensemann, 1873-1934)：イングランドの高等学校で語学を教え、ドイツにサッカーを伝えた。DFBの設立にも寄与する。現存するスポーツ誌*Kicker*を、1920年に創刊した人物でもある。

彼らに共通するのは、国境や宗教にとらわれない実務家であったという点である。ドイツの枠を越えて視野が世界に及び、他外国に対して偏見がなく、反ユダヤ主義者でもなかった⁵⁾。

ギムナジウム教師のコッホに代表される考え方は、サッカーによって、身体だけでなく、自由と規律の両面から青少年を鍛えることができるというものであった。すでに工業化が進んで都市部の青少年の健康状態が悪化し、ギムナジウムの生徒にもタバコや酒の弊害が現れ始めていた。コッホの意見は、教師をはじめ、医者や衛生関係者の間に受け入れられ広まっていった。なにより、実際にプレーをした子供たちが、この新しい身体運動の楽しさにひかれていった⁶⁾。

コッホは、あくまで学校スポーツとしてのサッカーをイメージしていたが、生徒たちは卒業すると、こんどは自分たちでクラブを作るようになった。こうして次第に愛好者を増やしたサッカーは、19世紀から20世紀の変わり目に、多くのクラブの設立を見ることになる。ただし、当時は進歩的な教師のいる上級学校とその周辺を中心に行われており、労働者階級がサッカーと結びつくまでには、まだ時間がかかった⁷⁾。

3. クラブの起こりとDFB

19世紀が20世紀へと変わる頃、サッカーはブルジョア階級を中心に次第に浸透していった。現存するクラブを例にとれば、ハンブルクSV (1887年)、ヘルタ・ベルリン (1892年)、アイントラハト・フランクフルト (1899年)、FCバイエルン (1900

年), FCシャルケ04 (1904年), BVBボルシア・ドルトムント (1909年) といった有名クラブがこの時期に産声をあげている。

複数のクラブが存在すれば, 対抗戦や大会が行われるようになり, それを統括する組織が必要になる。1890年代に, 各地域や都市で諸クラブを統括する協会の設立が試みられ, 1900年1月28日には, ドイツ全土を統括するドイツ・サッカー連盟 (DFB) がライプチヒに設立された。これにより, 他国との国際試合や国内の選手権を主催する母体ができあがった。1903年には第一回のドイツ選手権が開かれ, 1908年4月には最初の国際試合がスイスとの間で行われている⁸⁾。

DFBの所属クラブと会員数は年をおうごとに増えていった。1900年のDFB設立時には60にすぎなかった加盟クラブが, 1910年には1,000を越え, 会員数も8万2千人に急増した。さらに1920年には, クラブ数3,000強, 会員数47万人弱の大組織に成長していった⁹⁾。

4. 労働者階級の参加とその他の組織

町のクラブでの活動が日常的になると, プレーを見ていた労働者たちがこのスポーツに興味を示すようになる。とはいえ, 労働者階級への浸透には時間がかかった。というのも, 20世紀の初頭, 彼らの労働時間は平日が6時から18時まで, 土曜日は6時から15時までと長く, 余裕がなかったためである。それでも, 労働者やその近くに住む手工業者, 商人, 飲食店主, 医者, 教員, 公務員たちが一緒になってクラブを作った例も見られた。ブルジョア階級の者がクラブの執行部につき, DFBに加入するチームが多かったという¹⁰⁾。

19世紀も終わりに近づく頃, サッカーに限らず他のスポーツでも労働者のクラブが数多く誕生していた。それを統括する組織として1893年に設立されたのが労働者体操連盟 (Arbeiter Turnerbund, ATB) である。後のヴァイマル期に労働者体操・スポーツ連盟 (Arbeiter Turn-und Sport-Bund, ATSB) と名称が変わる。この組織も, 1920年代後半には, 77万もの会員と8,000のクラブを抱える団体に成長していた。サッカーに限れば, 1920年当方で1,500を越えるチームと2万6千を越える会員がいた¹¹⁾。

このように, ひとくちに労働者階級といっても所属クラブには少なくとも2種類あった。DFB傘下の「ブルジョアのクラブ」に所属する労働者選手と, ATSBに属する「労働者のクラブ」の労働者選手である。DFBとATSBという2つのまったく性格を異にする団体は, それぞれに「ドイツ選手権」や「国際試合」を開催してい

た¹²⁾。現在の視点で過去を振り返るとき、DFBのもとに行われた「ドイツ選手権」や「国際試合」が語られることが多いのだが、それと並ぶもうひとつの「ドイツ選手権」と「国際試合」があったということは興味をひく点である。労働者階級の人々は、1925年7月、フランクフルト・アム・マインで第一回の国際労働者オリンピック（Erste Internationale Arbeiter Olympiade）を開催しており、そのスポーツ活動をめぐる研究は今後の大きな課題である¹³⁾。

労働者やブルジョアのスポーツ組織のほかにも、1920年にカトリック系のDeutsche Jugendkraft（DJK）、1921年にプロテスタント系のEichenkreuz、さらに同じ時期に、ユダヤ系の2団体であるSchild（1920年）とMakkabi（1921年）が設立されている。また、ドイツ体操家連盟（DT）傘下でも「サッカー部門」を設置するクラブが増えてきた。1927年には、DFBのドイツ選手権と並んで、ATSB、DJK、DTがそれぞれ独自に主催する選手権が開催され、複数のサッカー・ドイツチャンピオンが誕生する結果となった¹⁴⁾。

5. ヴァイマル時代

第1次大戦中、1915年から1919年まで、DFBのドイツ選手権は中止された。戦火がおさまると、戦後の閉塞状況の中でストレスのはけ口をスポーツに求めた国民の気持ちが一気に過熱する。試合には万単位の観客が集まるなど、サッカーが大きなブームとなった。ヴェルサイユ条約での武装解除もあり、軍隊の訓練に代わるものとしてスポーツが好まれたという。第1次大戦前に19万人弱であったDFBの会員数は、1931年には百万人を突破した¹⁵⁾。

ここにいたるひとつの大きな理由は、あらたに政権を担当したSPD（ドイツ社会民主党）が「一日8時間労働」の法律を制定したことにほかならない。これにより、初めて労働者にサッカーを楽しむ時間的な余裕が生まれた。金属労働者や炭鉱労働者は、単調な仕事からの息抜きとしてこのスポーツを歓迎したのである。こうして、ブルジョアだけでなく、労働者もさまざまなスポーツに親しめる時代が出現した¹⁶⁾。

また、失業者の多い社会状況の中、政府の雇用創出計画により、スタジアムの建設が相次いだことも見逃せない要因である。1922年ヴェダウ・スタジアム（デュースブルク）、1923年ミュンガースドルフ・スタジアム（ケルン）、1927年ローテ・エルデ（ドルトムント）、1928年グリュック・アウフ・キャンプバーン（シャルケ）など、今も残る競技場の多くがこの時期に建設されている。プレーする場所に不足がちだったサッカー関係者には、一連のスタジアム建設は、慈雨のような出来事で

あったことだろう。こうして、サッカーは、第1次大戦後に、真の意味で大衆のスポーツへと発展していったのである¹⁷⁾。

ヴァイマル期のサッカーには、ベルリン・オアシス (Berliner Oase) といったクラブのように、俳優、芸人、作家たちが作った同好会の記録もある。参加者の中には俳優のハンス・アルバースやラジオ関係者、ヴィリ・マイルスやヴァルター・トリアといったジャーナリストや画家たちが集っていた。有名人の座興の試合についてのコメントが新聞や雑誌に載り、それが一般の興味をひいて、さらにサッカーが広まる結果となった。

普及し始めたラジオが国際試合の様子を伝え、有名選手はアイドルのような存在になった。大都会に暮らす人々は、新しい時代への息吹を感じ、新しいライフスタイルを求める時代となった。1932年は、「ゲーテ没後100年」であったが、すでにドイツは、ゲーテの時代から大きく変貌していたのである¹⁸⁾。

6. オーストリアのサッカー

「サッカーの母国」である英国は別格として、1920年代のヨーロッパ大陸におけるサッカーの中心地は、欧州中央部のウィーン、ブダペスト、プラハといった諸都市であった。

そのころ、ウィーンにフーゴ・マイルス (Hugo Meisl, 1881-1937) という人物がいた。富裕なユダヤ系商人の家に生まれ育った彼は、少年時代からサッカーに魅せられ、生涯をこのスポーツに捧げた。選手や審判として活躍しただけでなく、オーストリア・サッカー協会会長を務めた。そのうえ、さらには1912年から37年までの長きにわたり代表チーム監督も引き受け、キャプテンと呼ばれていた。前節に名を挙げたジャーナリストのヴィリ・マイルスは、フーゴの弟である。

ドイツ語のほか、チェコ語、英語、イタリア語、ハンガリー語にも堪能だったフーゴ・マイルスは、諸外国との交流にも意をそそいだ。彼の提唱により、「ミトロパ・カップ (Mitropa Cup, 中欧カップ)」というクラブ対抗の大会が1927年から始まった。これは、ヨーロッパ中央部に位置するオーストリア・ハンガリー・チェコスロヴァキア・イタリアといった当時のサッカー強国のクラブチームが、国境を越えて競った大会であり、ファンのあいだに大きな人気をよんだ。現在のチャンピオンズリーグのひな形ともいえる。

一方、オーストリア代表に関しても、このマイルス監督のもと、1931年にすばらしいチームが誕生した。強豪スコットランドに5対0と圧勝したのを手始めに、そ

の後12戦無敗の成績を残し、ドイツと対戦した2試合でも5対0、6対0と大差で破った。熱狂したファンは、「奇跡のチーム (Wunderteam)」と絶賛した¹⁹⁾。

1932年、「奇跡のチーム」は、そのハイライトを迎える。場所はロンドン、相手は世界最強といわれた「サッカーの母国イングランド」である。結果は3対4の惜敗だったが、「個人技とパスワークのウィーン派サッカー」は、ロンドンの観衆を魅了した。ちなみに、後の1936年5月にウィーンで行われた試合では、オーストリアが2対1でイングランドを破っている。オーストリアを中心とするヨーロッパ大陸中央部の国々のレベルの高さがこれで証明されたことになる。

マイスルの功績として第一に挙げられるのは、1924年、各国に先がけて、いち早くプロ制度を取り入れた点であろう。そのオーストリアでのプロ化に刺激され、チェコスロヴァキア (1925年)、ハンガリー (1926年)、イタリア (1933年) と、周辺諸国も次々とプロ制度の導入に踏み切った。後にナチ党が抱いた「プロ化の仕掛け人はユダヤ人」というイメージは、この頃から出来上がったのであろう。

マイスルは、1938年2月17日、心臓発作でこの世を去った。オーストリア・サッカー連盟の一室で執務中の出来事だったという。ドイツによるオーストリア併合が行われたのは、その一カ月後であった。

II. 第2次大戦期のドイツのサッカー事情

1. ナチスの政権下におけるサッカーの扱い

ヒトラーが政権の座についた1933年1月以降、サッカー界にも大きな変化が訪れた。それまでは、ドイツ帝国体育委員会 (Der Reichsausschuss für Leibesübungen, DRA) のもとに、DFBを含む各種スポーツの競技団体が連なっていた。67,683クラブと660万人を越す大きな団体である²⁰⁾。この委員長を務めていたテオドル・レヴァルト (Theodor Lewald) が、ユダヤ系であることを理由に解任されると、DRAは消滅していった。

1933年4月、新たに「帝国スポーツ委員 (Reichssportkommissar)」という役職がもうけられた。貴族の血を引くナチ黨員、チャマー・ウント・オステン (Hans von Tschammer und Osten, 以下チャマー) がその地位に就き、名称は後に「帝国スポーツ指導者 (Reichssportführer)」と変わった。

消滅したDRAの代わりとして作られた組織が、「ドイツ帝国体育連盟 (Deutscher Reichsbund für Leibesübungen, DRL)」であった。各スポーツの競技団体は、このDRLのもと、それぞれ定められた特別局 (Fachamt) に配置された。サッカーは

特別局 2 として、ラグビー、クリケットと同じ部署に置かれた²¹⁾。

こうして、DFB (およびドイツのスポーツ界) は、実質、ヒトラーが政権の座についてまもなく、ナチ党の傘下におさまったことになる。もっとも、DFB 役員の中にもナチ党员がおり、必ずしもすべてに不本意な形で命令に従ったというわけではなさそうだ。1925から1945年までDFB会長を務めたフェリクス・リンネマン (Felix Linnemann, 1882-1948) の次のようなことばが残っている。リンネマンも、後にナチ党に入党している。

これまでのDFB役員が一同に介して、最初のスポーツ組織としてその解消を決定し、(中略) 設立されたばかりのナチ党のDRLに編入することを、本日、誇りに思う次第である²²⁾。

あまたあるスポーツ団体のうち、DFBが最初に宣言して自ら消滅したことになるが、役員をはじめとする組織そのものにさしたる変化はなかった。政権交代とそれに付随するスポーツ界の「編成変え」程度の認識であったものと推察する。

ナチスにすれば、スポーツ団体を統括したDRL内に、同じ競技種目の複数の団体が存在するのは好ましくない。こうして、ATSBやDJKといった労働者やカトリック系の団体をはじめとする他の組織は解体された。伝統を誇るドイツ体操家連盟 (DT) も消滅し、ドイツ的な体操 (Turnen) と英国スポーツのサッカー (Fußball) をめぐる議論にも終止符が打たれた²³⁾。

DFBは、結果として時流をうまくとらえて (あるいは時代に迎合して)、名より実をとって生き残ったといえよう。ちなみに、DRLは、1938年にナチス帝国体育連盟 (Nationalsozialistischer Reichsbund für Leibesübungen, NSRL) という組織に改組され、また一般人向けのレクリエーションを目的とした活動では、ドイツ労働戦線 (Deutsche Arbeiterfront) の下部組織である歓喜力行団 (Kraft durch Freude, KdF) が、諸々の企業を拠点に力を発揮した²⁴⁾。

2. ナチスのもとでの選手権

1933年から45年にかけては、DFBにとっての激動期であった。従来、DFBのもとには7つの地方協会が属し、その代表者が集まって方針を決めていたのが、すべてナチスの管理下に置かれることになった。もっとも顕著な変更点は、ドイツ選手権 (Deutsche Meisterschaft) の開催方式である。それまでは、先ず地方協会の主

催で大会を行い、勝者がドイツ選手権に進む方式であった。それを改め、ドイツ帝国全土を16の地域に細分化したガウリーグ（Gauliga）が、1933年9月より開始された。

ガウとは、もともと「川沿いの沃野」を意味し、古代ゲルマン時代の行政区画であったといわれる。それをナチスが大管区の名称に採用したのである。ガウは、ドイツが近隣諸国を併合するごとに増えていった²⁵⁾。

ひとつのガウには、その地域を代表する10のクラブが名を連ね、その下にさらに細かく分かれたBezirksliga（地区リーグ）というぐあいに、かっちりとしたピラミッド型の構成となった。16の各ガウ内で総当り戦を行った後、それぞれのチャンピオンが、4チームずつ4つのグループに分かれて、再び総当たり戦を行う。各グループの1位が、ベスト4として準決勝、決勝を競うという方式であった。決勝戦は、1937年からはベルリンのオリンピックスタジアムが舞台となった。

ガウリーグを基盤としたドイツ選手権は、大衆の圧倒的な支持を受け、特に準決勝以降の試合には10万人もの観客が訪れたという²⁶⁾。

リーグと並ぶもうひとつの主要な大会として、1935年から勝ち抜き戦のドイツ・カップ選手権が新たに創設された。このモデルは、世界最古の大会として有名なイングランドのFAカップである。名称は帝国スポーツ指導者の名を冠して「チャマー杯（Tsammer-Pokal）」とされた。

総当りのリーグ戦とノックアウト式の一発勝負のカップ戦は、サッカーの盛んな国でよく見られる2本柱の大会であり、現在のドイツでも、ブンデスリーガ（Bundesliga）とDFBカップ（DFB-Pokal）が、国内の2大大会となっている。歴史をたどれば、ドイツにこの方式が定着したのは、ナチス時代ということになる。

新しい大会方式が定められ、人気はさらに沸騰したとはいえ、サッカーだけに熱中してられる時代ではなかった。1939年9月のポーランド侵攻を境に、状況は大きく変わった。徴兵のため選手をそろえられないクラブが続出し、ガウリーグはそれまでのレベルを維持できなくなっていく。特別規則として、兵隊であれば本来の所属クラブでなくとも、任地先のクラブでの出場が認められるようになり、各クラブは、活動を一時停止するか、あるいは臨時に近隣のクラブと融合するかという選択をせまられることが多くなった。一般に、1939年から終戦までの大会はKriegsmeisterschaft（戦争期の選手権）と呼ばれている²⁷⁾。

3. シャルケ04とプロ問題

戦時下のドイツ・サッカーを代表するチームといえばシャルケ04であろう。1904年、ルール工業地帯のゲルゼンキルヘン市シャルケ地区に創設されたことからこの名を冠されたクラブである。1933年から1944年まで、常にガウ・ヴェストファーレンのトップに君臨し、資料②でも分かるように、この間6度のドイツチャンピオンに輝いた強豪であった。

シャルケの地位は独自である。工業地域の労働者によって発展してきたクラブではあったが、労働者スポーツ運動が掲げていた階級闘争への志向は皆無であった。そのため、ブルジョアの組織であるDFBに加入し、次第に力をつけていった。

1930年、シャルケはスキャンダルに巻き込まれた。選手たちがクラブから報奨金を得ていたことが発覚し、出場停止の罰を受けたのである。プロ制度のない時代、アマチュア規定に違反するということが大問題になった。選手の出場停止は後に解除されたが、チームは大きな打撃を受けた。

シャルケに限らず、当時は、クラブが有望選手に陰で闇給与（Schwarzgeld）を渡しているのは、いわば公然の秘密であった。プロ制度のない時代、公明正大さを保つため、スポンサーとなった企業が、実際に選手を社員として雇ったケースもあったという²⁸⁾。

ここにあって、ヴァイマル時代からすでに白熱した議論が展開されていたプロ化の問題が再燃する。1932年10月と1933年1月のDFB総会では、「プロ化もやむなし」という肯定論と、「絶対反対」の意見がぶつかりあって結論が出ず、あらためて1933年5月の総会で決着という運びになった²⁹⁾。

ところが、1933年1月末にヒトラーが政権の座に就いたことにより、すべてが白紙にもどされた。ナチスのサッカー（をはじめとするスポーツ）の意味づけは、なにより身体の鍛錬を宗とし、将来の兵役への予備訓練として役立つというものであった³⁰⁾。もうひとつの大きな理由は、上述（I章6.）したように、プロ化はユダヤ人とむすびつくという考え方による。いずれにせよ、プロ制度の導入に関しては、これで一気にケリがついた形となった。

「労働者のチーム」シャルケは、ナチ党のスタイルに合っていたのであろう。地下で石炭を掘り、溶鉱炉で汗にまみれた労働者の仲間が、サッカーのピッチ上ではなばなく活躍する。プレーを見つめる観客も同じ労働者仲間であり、そこに独特の一体感が生まれたとしても不思議ではない。勝利への意思、仲間との友情、戦う気力…これらを具現したのが当時のシャルケであり、それはまさにナチス好みの

キーワードであった。無論、シャルケの位置するルール地方が、軍需産業とむすびつきやすい鉄鋼や石炭業の中心地であったことも無関係ではないであろう。

当時、国民の士気を盛り上げるために製作された映画Das große Spiel（大試合、1942年）では、炭鉱町のサッカークラブを舞台に、友情、恋愛、栄光といったテーマが扱われている。いわば他愛のない宣伝娯楽映画であり、架空の物語なのだが、そのチームのモデルがシャルケであることは一目瞭然である³¹⁾。

政府好みのシャルケが、他チームに比べて厚遇を受けていたという証言もある。選手の中には、スラブ系の者も含まれていた。クッツォラ（Ernst Kuzorra）、チェパン（Fritz Szepan）など、ユダヤ系ではないにせよ、名前を聞くだけでも明らかに東欧からの移民の子孫、つまり「アーリア人ではない」ことが分かる。この件については、彼らが旧東プロイセンのマズリア地方出身（マズリア人）であるという説明がなされたという³²⁾。

4. ユダヤ系の選手と役員

ヒトラーが政権を握る前、ドイツ国内に暮らしていた50万人のユダヤ人のうち、およそ4万人がスポーツ活動を行っていたといわれる³³⁾。

第2次大戦前、オーストリアのウィーンで、ユダヤ系のフーゴ・マイルスがサッカーの普及に先駆的な役割を果たしたのと同様、ドイツ国内でも多くのユダヤ系のサッカー関係者が活躍していた。彼らが、いかにドイツ・サッカーに貢献したかを一人一人数え上げればきりが無い。ここでは、代表的な2名を挙げる。

ひとは、上述（I章2.）のベンゼマン（Walther Bensemann）である。1873年、ベルリンの富裕なユダヤ人の家庭に生まれた彼は、英国で教育を受け、サッカーにひかれていった。その足跡はドイツ、スイス、フランスにおよび、それぞれの地でクラブを設立した。1900年のDFB設立に貢献し、その名付け親でもあった。1920年には有名なスポーツ誌キッカーを創刊するが、1933年、ヒトラー政権のドイツを去って、スイスに移住。同年、そこで亡くなった³⁴⁾。

もうひとは、FCバイエルンの会長を長く務めたランダウアー（Kurt Landauer 1884-1961）である。彼は、途中短い中断はあるものの、1913年から33年まで会長の座にあった。常に将来を見すえる目をもっており、いつかはプロの時代が来ると見越していた。そのため、すでにチーム強化のための選手補強もしていたといわれる。1932年には、彼がチームに引き入れた選手の活躍で、FCバイエルンが初めてドイツチャンピオンに輝いた。

1933年、ランダウアーは会長職を退いた。その後、強制収容所に収監されるという体験もしながら、かろうじて戦争を生き延び、戦後は再びFCバイエルンの役員として活動した³⁵⁾。

ランダウアーが、会長職を退いた背景には、1933年4月7日に交付された「職業官吏再建法 (Gesetz zur Wiederherstellung des Berufsbeamtentums)」があった。これによりユダヤ人公務員は排除される結果となり、スポーツ関係の役員も含まれていた。同年4月19日、DFBはこの法を役員だけではなく一般会員や選手にも適用した。それまでの所属クラブを追われたユダヤ人は、ユダヤ人のスポーツクラブに入会し、彼らの多くは、I章4. で述べたMakkabiやSchildでスポーツ活動をつづけた。

ユダヤ人のスポーツ活動そのものに対して、ナチスは、さしあたり寛大な一面を見せていた。すでにその時点で1936年のオリンピック・ベルリン大会開催が決定していたため、世界がナチ党のドイツに注目し、時には懐疑的な目を向けていた。最悪の場合には、他国がオリンピックをボイコットする懸念もあった。チャマーが、帝国スポーツ指導者に任命されたのも、スポーツにおける国際交流に配慮し、彼の貴族出身という肩書きと、語学に堪能な才をかわれてのことであったとの指摘もある³⁶⁾。しかし、すべてはオリンピックの2年後、1938年11月9日の「水晶の夜」を契機に終わりを告げた。

後の1974年、当時の西ドイツ (ドイツ連邦共和国) で第10回サッカー・ワールドカップが開催され、時のアメリカ合衆国国務長官ヘンリー・キッシンジャーが観戦に訪れて話題になった。キッシンジャーは、もともとドイツ生まれのユダヤ系であり、ナチスの時代にアメリカに移っていた。それでも、サッカー好きは変わらず、ひいきチームであるドイツのフルト (SpVgg Fürth) の順位を常に気にかけていたという³⁷⁾。ちなみに、1910年代から20年代にかけてのフルトは、隣接するニュルンベルクとともにドイツ・サッカーの中心地だった。複数の団体がドイツ選手権を主催していた当時 (I章4.)、DFB傘下のSpVgg Fürth (1914年, 1926年, 1929年), ATSB傘下のTSV Fürth (1920年), DT傘下のMTV Fürth (1925年, 1926年) というぐあいに、フルトの3つのクラブがそれぞれの「ドイツ選手権」で優勝しているほどである。

キッシンジャーに代表されるようなサッカー好きのユダヤ人が、戦時中に多くアメリカに渡ったことは、後のアメリカにおけるサッカーの発展に影響を与えているものと推察される。この点も今後の研究課題である。

5. オーストリア併合と代表チーム

1934年、ドイツはイタリアで開催された第2回ワールドカップで3位という好成績をおさめ、ラジオで聞き知った国民は熱狂した。ドイツ帝国代表チームの活躍が、どれほど国民を夢中にさせ、また他国との親善に役立つかを、宣伝の巧みなナチ党が見逃すはずがない。以降、頻繁に政治がサッカーに介入するようになった。

代表選手は、ユニフォームの胸に「ハーケンクロイツの付いた帝国の鷲」を抱き、試合前の国歌吹奏では、右腕を高く掲げる「ヒトラー式敬礼」を強制された。己の信念に従ってこの敬礼をせず、追放になった選手もいる。両国歌に加え、当時のドイツの事実上の第2国歌ともいえる「ホルスト・ヴェッセルの歌」まで吹奏され、その間、選手は掲げた右腕がしびれてきたという³⁸⁾。

歴史をさかのぼると、ドイツ代表の最初の国際試合は1908年4月の対スイス戦であった。その当時は専任の監督がおらず、連盟の委員会が選手を選抜していた。初めて代表監督制を導入したのは1926年10月のことであった。

初代監督はオットー・ネルツ (Otto Nerz 1892-1949) である。マンハイム出身のネルツは、国民学校の教員として最初の職につき、第1次大戦では前線で戦った。1919年にはSPDに入党している。大戦後も教職にあり、その間地元のマンハイムのクラブでサッカーをつづけ、監督も兼任していた。

1922年、ネルツはベルリン体育大学での勉強を開始する。彼のテーマは、サッカーのトレーニング法に関するものであった。この時期にDFBの主催するサッカー指導者養成の講習会を任され、それがドイツ帝国代表監督の道につながった。1926年から36年のベルリン五輪まで代表監督を務め、その職務と並行してベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム大学で医学を修めた。ネルツ監督のもと、1934年のワールドカップでドイツが3位に入賞したことは上述の通りである。

ネルツにとって、ヒトラー政権下での代表監督の仕事は、必ずしもマイナス面ばかりではなかったようだ。それ以前は地方協会の力が強く、代表選手の召集に苦労していた。それが、ナチスの号令のもと、国の最強チームを作るために、さまざまな便宜が計られたのである。地方協会の横槍もなくなった。時には政府の思い入れが強すぎて、1935年の1年間には17もの国際試合が計画され、選手の不評をかったこともあるという³⁹⁾。

第2次大戦後、ネルツはソ連軍に逮捕され、ベルリン郊外ザクセンハウゼンの収容所で亡くなった。戦時中、ナチ党に入ったことがその原因かもしれない。ネルツに関しては不明な部分が多く、評価は今後の研究に委ねられている。

ひとつ彼の功績をあげれば、ドイツ・サッカーに体系的な指導法をもたらしたことであろう。彼の理論はベルリンの体育大学で実践された。戦後、その理論は、ネルツと同じマンハイム出身の弟子ゼップ・ヘルベルガー (Sepp Herberger, 1897-1977) をはじめとする関係者によってさらに発展し、現在ではケルン・スポーツ大学で実践されている。

ヘルベルガーは、1936年、ネルツの後任としてドイツ帝国代表監督に就任した。さしあたりの目標は、1938年にフランスで開催されるワールドカップであった。ところが、大会直前の3月になって、ドイツはオーストリアを併合した。ヘルベルガーには、上層部から「ドイツ代表選手と、旧オーストリア代表選手を融合させたチームを作れ」との指令が下った。具体的には、「6名のドイツ選手と5名のオーストリア選手」、もしくは「5名のドイツ選手と6名のオーストリア選手」で代表チームを作れというものである。結果としてこの融合は失敗に終わり、1938年ワールドカップでは、1回戦で敗れ去った⁴⁰⁾。

ちなみに、I章5. で記したように、オーストリア代表は、1920年代に「奇跡のチーム」と呼ばれた強豪である。ほとんどの選手はウィーンのクラブで活躍していた。併合の後、オーストリア全土が、ガウ・オストマルク (Ostmark) という名称に変わったが、クラブチームの強さはそのまま持続し、毎年激戦を勝ち抜いたウィーンのいずれかのチームがドイツ選手権に駒を進めた。1938年以降、終戦までに6回のドイツ選手権と6回のカップ戦 (合計12回) が行われた中で、ウィーンのチームは5回決勝に進出し、そのうち3回優勝を遂げている⁴¹⁾。

国際試合には、第一に両国の友好や親善をはかる目的がある。ヒトラーが政権の座についた1933年から、1942年の戦中最後の国際試合まで、ドイツは105回の国際試合を戦っている。資料①は、それを大きく3期に分け、その間の対戦国をまとめたものである。サッカーの国際試合にも、それぞれの時期でのドイツの状況が反映されているように思う。特に、ポーランドに侵攻して、ヨーロッパ戦線の火ぶたをきった1939年以降は、対戦相手も限られ、ほぼ同じ国 (友好国, 中立国) と繰り返し国際試合を行っていることが分かる⁴²⁾。

宣伝相ゲッベルスは、サッカーを「敵国のスポーツ」とはあからさまには言わないまでも、とにかく勝利を求めたという。ドイツの強さを誇示するとともに、周辺諸国との友好を目的に、国際試合は1942年11月のスロヴァキア戦までつづけられた⁴³⁾。

1942年以降、戦争はさらに激しくなり、代表選手もスパイクを軍靴にはきかえて

戦地に赴いた。「一流選手は、模範兵でなくてはならない」とされる時代であった。当時の代表候補選手77名のうち、34名が戦死したという記録が残っている⁴⁴⁾。

6. 終戦と国際舞台への復帰

厳しい状況の中、ナチスがサッカーを許可していた背景には、戦争に疲れた国民の士気を高める意図があったようだ。大会は、1944年になってもまだつづいた。

戦中最後のドイツ選手権となった1944年の決勝の対戦は、「ドレスデンSC対ハンブルク空軍クラブ」という珍しい組み合わせとなった。ドレスデンSCは、ザクセンの伝統クラブであり、前年度のチャンピオンでもあるため決勝戦に進出しても不思議ではないが、ハンブルク空軍クラブは、戦中に一気に伸びてきたチームであった。これは、ハンブルク周辺に駐屯する兵士のチームであり、1943年のカップ戦でも決勝まで進出している。

戦時下のサッカー活動として、このような軍隊チーム（特に空軍が多かったようである）の存在を無視することはできない。戦争が激化し、すでに個々のクラブではチームを維持できなくなっていた。そんな折に、戦前にはなじみの薄かった軍隊チームや企業のクラブチームが、しばしばガウリーグやカップ戦で活躍したという。一般のクラブとは異なり、軍隊や軍需産業に連なる特定の企業チームには、選手を集めておく方策があったのだろう。1942年のカップ戦のプロセスでは、勝ち残った62チームの中に9つの空軍チームが含まれていたといわれる。サッカー好きの将校が、徴兵された有名選手を自分の隊に集めたという話も残っている⁴⁵⁾。これらの軍隊チームや企業チームの資料はまだ十分ではなく、今後の研究課題として残されている。

その軍隊チームにも、1944年12月には活動停止命令が出された。ハンブルク、ベルリンと連合軍の空襲がつづき、1945年2月にはドレスデンが破壊された。そして、1945年5月、ドイツが無条件降伏してヨーロッパでの戦争は終わりを告げた。

戦後、オーストリアは、即座にFIFA（国際サッカー連盟）への再加入がかない、1945年8月19日、ブダペストの対ハンガリー戦で国際舞台に復帰した。

ドイツでも、終戦と同時に各地でサッカーが復活した。FIFAからは締め出されていたため国際試合は不可能であったが、国内では1946年に早くも地域ごとの選抜チーム対抗戦が行われている。それは同時に空腹との戦いでもあった。食料の確保がすべてに優先され、スポンサー付きの試合や、食べ物を入手しやすい農村部でのゲームが組まれると、選手たちの意気は大いにあがったという。食料調達のための

試合を、事実上のプロ化の萌芽と見ることもできるであろう⁴⁶⁾。

1949年になるとドイツは2つの国に分裂し、サッカーも別々の道を歩むことになった。ナチス時代に消滅したDFBは、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）で再興された。

1950年6月、DFBはFIFAに復帰した。そして、同年11月22日、シュトゥットガルトで戦後初の国際試合であるスイスとの対戦を迎えた。1942年11月22日に行われた戦中最後の国際試合（スロヴァキア戦）から、ちょうど8年の歳月が流れていた。西ドイツを率いるのはゼップ・ヘルベルガーである。戦中のナチ党への入党が問題にされ、非ナチ化審査を受けた上で、あらためて代表監督に就任していた。

11万5千人の大観衆のもと、スイス国歌吹奏のあと、ドイツ国歌のかわりに、戦争の犠牲者に対する黙祷がささげられた。その後、戦前からのドイツ代表選手で、主将を務めるアンドレアス・クプファーが、スイスの主将ヴィッケルと試合前のトスを行う。ドイツ・サッカーの戦後が、こうしてスタートした。

むすび

地球と人類のたどってきた長い年月に比べれば、サッカーというスポーツの歴史は、たかだか150年弱に過ぎない。我々が趣味を同じくする同好の士とクラブや団体を起こすとき、その声をかける範囲は、比較的近い階層や年齢の人々であることが多い。それは日常生活の中で、自然の行き来や交流が可能だからである。その最たるものが学校や職場ということになる。

ドイツ各地にサッカークラブが創設された事情も、それと似たようなものであったと推測される。各地にクラブが起これば、クラブ間の交流をスムーズにするための上部組織が必要となる。こうしてクラブの創設、それを統括する各地の協会、さらにそれらの協会を傘下におく連盟が設立されていく。

それらの協会や連盟は、規模が大きくなればなるほど国家とも関わりをもつようになる。その国家が歴史上で特異な位置を占めるとき、その一部（下部組織）である協会や連盟も、また、独自の意味を持つことになる。戦中のドイツ・サッカーは、現在とはまったく異なるサッカー世界であり、現代史の一分野として、「ドイツ・サッカーの歴史」も、また検証されてしかるべき時期にさしかかっている。テーマや課題は多い。小論が、さらなる研究への端緒となることを願う。

[追記] 2003年度の1年間、駿河台大学の在外研究の制度により、ミュンヘン大学客員研究員として、彼の地で学ぶ機会を与えていただいた。本稿は、その成果のひとつである。謝意を表する次第である。

註

- 1) Herberger, Sepp: Fußball S. 2 ff WM Römer, 日本の蹴鞠, イタリアのカルチョもその一種である。
- 2) Rohr, Bernd u.a.: Fussball Lexikon (当該国の項参照)
- 3) Grüne, Hardy: 90Jahre deutscher Liga-Fußball S. 13
- 4) Eggers, Erik: Fußball in der Weimarer Republik S. 15ff.
- 5) Schwarz-Pich, Karl-Heinz: Der DFB im Dritten Reich S. 10f.
- 6) 前掲書 [3] S. 20ff., 前掲書 [6] S. 11ff.
- 7) 前掲書 [3] S. 54
- 8) DFB設立以前にも国際試合は行われている (Urländerspiel)。Deutschlands Fußball Länderspiele S. 9f.
- 9) 前掲書 [3] S. 40
- 10) 前掲書 [5] S. 16
- 11) Fischer, Gerhard u.a.: Stürmer für Hitler S. 71, 前掲書 [4] S. 88
- 12) 前掲書 [3] S. 54, S. 69ff., 前掲書 [11] S. 72ff.
- 13) Erste Internationale Arbeiter Olympiade (Erinnerungsschrift), 前掲書 [3] S. 78ff.
- 14) 前掲書 [3] S. 97
- 15) Bitzer, Dirk u.a.: Stürmen für Deutschland S. 19, 前掲書 [4] S. 12
- 16) 前掲書 [3] S. 54, 前掲書 [15] S. 19
- 17) 前掲書 [4] S. 31, 前掲書 [15] S. 20
- 18) 前掲書 [4] S. 33ff.
- 19) 当時のオーストリアで「チーム (Team)」といえば代表チームのことであった。Müllenbach, H.J u.a.: Das Wunderteam S. 4ff.
- 20) 前掲書 [3] S. 95
- 21) 前掲書 [15] S. 31
- 22) 前掲書 [3] S. 97
- 23) 前掲書 [3] S. 91
- 24) 鎗田英三他: 20世紀ドイツの光と影 S. 150, 前掲書 [3] S. 93

25) ガウリーグには次のようなものがあった。

Bringmann, Gilbert: Fußball-Almanach 1900-1943

1. 東プロイセン
 2. ポンメルン
 3. ベルリン・ブランデンブルク
 4. シュレジエン
 5. ザクセン
 6. ミッテ(中央部)
 7. ノルトマルク
 8. ニーダーザクセン
 9. ヴェストファーレン
 10. ニーダーライン
 11. ミッテルライン
 12. ヘッセン
 13. ズュートヴェスト(南西部)
 14. バーデン
 15. ヴェルテンベルク
 16. バイエレン
 17. オストマルク(旧オーストリア, 1938年以降)
- さらに、1939年からズテーテンラントが加わり、1940年からアルザスとダンチヒ・西プロイセンが加わった。

26) Schön, Helmut: Fußball S. 107

27) 前掲書 [3] S. 117

28) 前掲書 [3] S. 120ff., 前掲書 [11] S. 152ff.

29) 前掲書 [3] S. 104, 前掲書 [5] S. 29

30) 前掲書 [3] S. 92

31) DVD 100 Schalker Jahre, 前掲書 [15] S. 121f.

Das große Spielの監督はR.A. Stemmler (Bavaria-Film制作)

32) 前掲書 [15] S. 62f.

33) 前掲書 [11] S. 189f.

34) Sculze-Memering, Dietrich: Davidstern und Lederball S. 82ff.

35) 前掲書 [15] S. 75ff., 前掲書 [34] S. 60ff.

36) 前掲書 [11] S. 193f.

37) 前掲書 [34] S. 10

38) 前掲書 [15] S. 31f., 前掲書 [26] S. 41f.

39) Buschmann, Jürgen u.a.: Sepp Herberger und Otto Nerz S. 31ff.,
前掲書 [11] S. 96f.

40) 2004年9月にヘルベルガーの弟子であったデトマル・クラマー氏から直接伺った。
同様の記述は、前掲書 [26] S. 84にもある。

41) 資料②参照。1938年カップ戦優勝(ラビット・ヴィーン), 1941年ドイツ選権優勝(ラ
ビット・ヴィーン), 1943年カップ戦優勝(ヴィエンナ・ヴィーン)

42) 資料①参照

43) 前掲書 [8] S. 171, 前掲書 [15] S. 124ff.

44) 前掲書 [15] S. 127 33人という異説もある。

45) Koch, W.H.: Die Königsblauen S. 94

また, Walter, Fritz: 11rote Jägerには, 軍隊チームの詳しい記述がある。

46) 前掲書 [15] S. 116ff., また, 前述 (註40) のデトマール・クラマー氏によれば, サッカークラブのスポンサーとして「BMW (Bäcker, Metzger, Wirte, 即ちパン屋, 肉屋, 飲食店主) が, 特に好まれた」そうである。

参考文献

Bitzer, Dirk u. Wiltung, Bernd: Stürmen für Deutschland (Campus 2003)

Bringmann, Gilbert: Fußball-Almanach 1900-1943 (Reprint) (Agon 1992)

Buschmann, Jürgen u.a.: Sepp Herberger und Otto Nerz (Agon 2003)

Egger, Anton: Österreichs Fussball Länderspiele Chronik 1902-1993 (Verlag Anton Egger 1994)

Eggers, Erik: Fußball in der Weimarer Republik (Agon 2001)

Fischer, Gerhard u.a.: Stürmer für Hitler (Werksatt 1999)

Grüne, Hardy: 90 Jahre deutscher Ligafußball (Agon 1995)

Haarke, Karl-Heinz u. Kachel, Georg: Fussball Sport ohne Grenzen (Die Lebensgeschichte des Fußball-Altnationalspielers Ernst Willimowski) (Laumann-Verlag, Dülmen 1996)

Herberger, Sepp: Fußball WM (Römer 1973)

Keppel, Raphael: Deutschlands Fußball-Länderspiele Eine Dokumentation 1908-1989 (Sport- und Spiele-Verlag 1989)

Koch, W.H.: Die Königsblauen (Droste 1975)

Müllенbach, H.J. u.a.: Das Wunderteam (Reprint) (Agon 1991)

Schön, Helmut: Immer am Ball (List 1970)

Schön, Helmut: Fußball (Ullstein 1978)

Schulze-Marmeling u.a., Dietrich: Davidstern und Lederball (Werkstatt 2003)

Schwarz-Pich, Karl-Heinz: Der DFB im Dritten Reich (Agon 2000)

Walter, Fritz: 11 rote Jäger (Copress 1959)

邦語文献

四宮恭二：ヒトラー・1932～34ドイツ現代史への証言 (上・下) NHKブックス 1981

マンデル, リチャード (田島直人訳)：ナチ・オリンピック ベースボール・マガジン社

1976

鎗田英三他編：20世紀ドイツの光と影 芦書房 2005

辞典・パンフレット・DVD

Lexikon für Fussball Freunde (Bucher 1978)

Rohr, Bernd u.a.: Fussball Lexikon (Copress 1991)

Erste Internationale Arbeiter Olympiade (Erinnerungsschrift) (Verlag Zentralkommission für Arbeitersport und Körperpflege 1925)

DVD: 100 Schalker Jahre (Kinowelt 2004)

資料① 「1933年～42年の国際試合と対戦相手」 合計105試合

第一期 ヒトラー政権誕生からベルリン五輪終了まで (1933-36)

第二期 ベルリン五輪終了後からポーランド侵攻前まで (1936-39)

第三期 ポーランド侵攻以降, 戦中最後の国際試合まで (1939-42)

(国・地域の後ろの数字は, その間のドイツ代表との試合数)

第一期	第二期	第三期
1933-36	1936-39	1939-42
国・地域21 (35試合)	国・地域22 (35試合)	国・地域13 (35試合)
	イタリア 2	イタリア 2
フランス 2	フランス 1	
ベルギー 3	ベルギー 2	
ノルウェー 3	ノルウェー 2	
スイス 2	スイス 4	スイス 4
ポーランド 3	ポーランド 2	
ハンガリー 2	ハンガリー 1	ハンガリー 5
ルクセンブルク 3	ルクセンブルク 4	
スウェーデン 2	スウェーデン 1	スウェーデン 2
チェコスロヴァキア 2	チェコスロヴァキア 1	
	スロヴァキア 1	スロヴァキア 4
		ボヘミア・モラヴィア 1
オーストリア 1		

第2次大戦期のドイツのサッカー

デンマーク 1	デンマーク 2	デンマーク 2
オランダ 1	オランダ 1	
アイルランド 1	アイルランド 2	
スペイン 2		スペイン 1
フィンランド 1	フィンランド 1	フィンランド 2
ルーマニア 1	ルーマニア 1	ルーマニア 3
エストニア 1	エストニア 2	
ラトビア 1	ラトビア 1	
ブルガリア 1		ブルガリア 3
イングランド 1	イングランド 1	
ポルトガル 1	ポルトガル 1	
	スコットランド 1	
	ユーゴスラヴィア 1	ユーゴスラヴィア 3
		クロアチア 3

資料② 「1932年～1944年のドイツ選手権およびカップ戦（チャマー杯）決勝カード」

左が勝者

	ドイツ選手権	カップ戦（チャマー杯）
1932	FCバイエルン対E.フランクフルト	—
1933	F.デュッセルドルフ対シャルケ04	—
1934	シャルケ04対ニュルンベルク	—
1935	シャルケ04対VfBシュトゥットガルト	ニュルンベルク対シャルケ04
1936	ニュルンベルク対F.デュッセルドルフ	ライプチヒ対シャルケ04
1937	シャルケ04対ニュルンベルク	シャルケ04対デュッセルドルフ
1938	ハノーファー対シャルケ04	ラピット・ヴィーン対フランクフルト
1939	シャルケ04対アドミラ・ヴィーン	ニュルンベルク対ヴァルトホーフ
1940	シャルケ04対ドレスデンSC	ドレスデンSC対ニュルンベルク
1941	ラピット・ヴィーン対シャルケ04	ドレスデンSC対シャルケ04
1942	シャルケ04対ヴィエンナ・ヴィーン	1860ミュンヘン対シャルケ04
1943	ドレスデンSC対ザールブリュッケン	ヴィエンナ・ヴィーン対ハンブルク空軍クラブ
1944	ドレスデンSC対ハンブルク空軍クラブ	—